

想畫、記憶畫(印象畫)模様に分られ、自由

畫は比較的年少者には年長者に用ひる。

お畫かきも、その機會を多く與へ、あらゆる方面の繪を豊富に畫かせ度い。寫生畫は即ち觀察畫で季節の花幼児の周圍に存するもの、寫生は有意義で實物をよくみて畫かせたい。聯想畫は、お話など聞いて後それを畫に畫くので面白い。記憶畫は、種々あるが、日曜日など日曜日した事を畫かせたりする。模様は年長幼児の題材であるが、出來うるならば、實物を用ひてその羅列を種々工夫して畫きたい。實物の方が畫案の觀念は比較的入り易いのではないであらうか。年少者は線のみ畫く。形は容易に出來ぬ、しかしそれでよい。線の交亂で、線の羅列でそれでいてその幼兒には一つの繪であり、物であるのである。大人は一口に下手だと名附つまらぬ手助けをするが大いに畫かせて、大人くさい指導は禁物である。その時その線の交亂でも名を聞取り記しておくが好い。その中に、線はある電車の窓になり、車になりしてやつと形が整つて來る。それからの進歩は目にみえて、その進歩毎に大なる賞讃は勵ましとなるのである。

る。

以上手技の指導を簡単に述べたが、保母は常に手技に於ても研究し、興味持ち、新しいもの、新鮮なるものを案出し、時代に即した手技をやらせたいものである。從來のもの、長所は取入れ、短所は改善し、常に新しい活力ある製作をする心がけたい。

觀察について

觀察の意味など今更言ふ迄もないが、他の保育項目のどれもがさうであるやうに、子どもの遊びの生活の中にあるものであるからそれを充分考へて指導してゆくのがもとであらう。子どもは大人が想像する以上に何でもを驚異してみ、感じ、楽しんでゐるのだから、それを正しく伸すやうに導いて、物事をぼんやりとみ過ぎず、何でもな落付いてみる習慣態度を養ひ、ぼんに淡い乍ら科學する態度のやうなものへと導き度いものである。

一、觀察するもの

ものである。

又幼兒の發達過程等の研究もその指導上に大いに力となるものであるゆゑ進んでこれにあたり、その熱意と努力によりより好き指導を與へられる心がけたいものである。

清水光子

自然物(動物、植物、礦物等)、自然現象、社會事物(年中行事も)などあらゆる事物が對象に選ばれる。子どもの興味あるもの、事を興味あるやうに扱ふ。

二、時、場所

保育全體がさうであるけれど殊に觀察は機會を捉へ、隨時隨所で行ひ度い、蟲の觀察にしてもゐる所そのまゝ、「先生こんな蟲があつた」といふ時そのまゝ、「きれいな翅ね、何してゐるのかしらみておませう、あんなにして葉っぱをたべて」といふ風に興味を引出し乍ら觀察させる。又今日は幼稚園に

大工さんが入つた、植木屋さんが入つたといふやうな時、その仕事を邪魔しないやうにみせるのもよいのである。又幼稚園の中に限らず時には店をみに行つたり、お百姓さんの田植をみに行つたり、兵隊さんの演習をみに行つたり、或ひはお隣の軒にかけたつばめの巢をみに行つたりする事も望ましい。その様な場合大勢と、しよに観る時の躰も出来るわけである。斯うした観察と共に、一つのものをつゞいてみてゆくのもよいことである。おたまじやくしを保育室で飼つてみるとか、お蠶を飼ふとか、種子を蒔いて水をやつたり除草したりして大人の園藝の手傳ひをし乍ら観察させるといふ事は色々な意味でよい事である。動植物のみでなく梅雨の頃のお天気を連続して観察してゆく事も亦よいことである。このやうに観察は機會捕捉といへ、決して無計劃、無方針であつてならぬのは勿論、充分計劃し用意して、しかもそれを真向からふりかささないで、ごく自然な形で観察させてゆくといふ風であり度い。

三、取扱ひの實際について

(一) 扱ひ方と整理

實物を、遊ばせ乍ら観察させ決してこの蟲は翅が何枚、足が何本とか花瓣が何枚を数へるだけにならぬやうにしたい。手で足で目で耳で直接觸れさせるやうに、子どもの中から観たものを引出すやうに、その意味から観察だけをするといふより手技、唱歌、遊戯等の項目に一しよにするのが望ましい。殊に観察は手技と伴つて兩方をいきゝとさせる。寫生、切紙などで親方が養はれ、観つばなしでなく整理される、寫生する場合「こゝが斯うなつてゐるのね」といふやうに注意する事はよいことであるがそこに見えないものまで話してきかせないでもよい、そして押しつけないやうに強ひないやうにしたい。

(二) 話合ひと疑問

観察し乍ら自然と話合ひの機會が多い。この話合ふ機會は保育の最もよい子どもとふれあふ時であるから先生の智識をたゞひろげて話すのでなく子どもの發表をきき、引出し、子どもも同話させるやうに導いてゆく。大人は子どもの發表、言ひ度いとしてゐる所を察し、助け出す役目であり度い。又話し合つてゐる中子どもは疑問をもつ。

観察し乍らでなくともよく「どうして?」「なぜ?」ときいてくる。「これはね、こうです」と答へる事は容易である。が「こうしないで出来るだけ子ども自身に解決させるやうにする。物知り先生でなく子どもと一しよにやつてみる先生であり度い。氣まめに、手まめに「さあ、どうしてかしら」と一應こちらも疑問にして出来ることは解決の道を講じる、もしその疑問がむづかしい場合は先生は知つてゐても「どうしてでせうね、では斯ういふのはなぜかしら」と疑問をうつすやうにする、が同じく疑問にしても物の名やどこにあるとかいふ様なものは教へる。先生もわからない時は本でしらべるとしてなほざりにしない。兎に角疑問がどんな種類にしてもそのまゝなほざりにしないで行ける所まで究明する態度を先生がもつことは大切なことであらう。観察指導の大切な點は子どもの、新しい世界へも疑問を助け、ひろげ解決への道をつけるのに大人がまめに心とからだを動かす事ではないかと思ふ。

四、觀察話と繪による觀察

觀察話はお話の種類の一つであつて觀察

材料を扱つたお話といふので本當に觀察ではない。これで幼稚園の觀察が出来るといふのは大いに誤りであらうと思ふ。お話の内容が所謂童話でなく空想の要素がなく事實であるといふのみと考へてもよいのであらう。

又繪や寫眞をみせる事がある。これは本當の意味の觀察からいへば邪道であると言つてはすぎるかも知れないがまあ本當の觀察とは言へない。みせたいが實物を存分にみせるわけにゆかない場合、例へば軍艦、飛行機、汽車などのやうなもの、動物の中で身近にないものなどである。これはし方がないから選ばれたよい繪や寫眞で、話で補ひつゝみせる。しかし機會があればのがさずみるやうにする。飛行機がとんで來たら出てみるし、若し戦車が通つたら出てみるといふやうに、汽車に乗つてどこかへゆくといふ子どもがあればよくみていらつしやいと注意するやうに。しかしどうしても繪でも寫眞でもぜひみせねばならないといふより斯うしたものへの關心を深めるやうに導く手段である事を忘れないやうにし度い。

以上で保育項目の觀察の指導についてほんのざつと書いてみたがまことに不備で、盡せなくて考へ足りない點のみであるが、これで全部といふわけでは勿論ないので、

自由遊びの指導

志村貞子

幼児の生活は遊びの中に精一ぱい發揮される。遊びの中に幼児の精魂が傾倒され、遊びに於て幼児の心身の發達が培はれてゆく。従つて保育に於ても自由遊びを基底としてよろ／＼の保育計畫が立てられるのである。

自由遊びとは幼児が自發的に自由に遊ぶことであるが、保育者の側からいへば、この間と幼児をその欲するところに任せて自由に氣儘に遊ばせておいて顧ないといふことであつてはならない。この自由遊びを適當に指導することによつてはじめて、幼兒の生活力を正しく存分に發揮せしめ、自由遊びをして保育の基底たらしめ得るのである。

研究しつゝどこまでも子どもと一しよに學ぶといふよりむしろ子どもの方から教へられ乍らやつてゆきたいと思ふ。

従つて、自由遊びの指導にあつては、先づ保育者自身の幼兒の生活に對する深い理解と、自由遊びへの認識が必要なのである。

自由遊びは幼兒自身の發意による遊びであるが自發的といつても、種々の遊具の力に俟つ場合が多いのである。従つて自由遊びには遊具が一つの重要な役目をもつて入つてくるわけである。滑り臺、ぶらんこ、杵登り、砂場、積木、人形、ま／＼こ道具、繪本類をはじめとして一枚の紙片、木片、繩等から種々の自然物にいたるまで、すべて幼兒にとつてよい遊び友達である。したがつてこれ等のものを幼兒の年齢、性情、能力に應じて適當に用意し、幼兒の遊び相